鵜沼古市場遺跡（A・B地区）

編集 各務原市埋蔵文化財調査センター
発行 各務原市教育委員会
TEL（0583）83-1123
平成13年3月9日

鵜沼古市場遺跡A地区 発掘調査航空写真（西より）

各務原市の南、愛知県との県境には大河川である木曽川が東西に横断しています。かつて、上流の北東山地部から下降してきた木曽川は、鵜沼古市場遺跡（各務原市鵜沼古市場町・鵜沼南町）が所在する一帯で、一気に流域を拡大したといわれています。その際、市内中央部から南部に広がる台地面（だいちめん）を大きく削り取ったため、これらの土地一帯は台地面よりも一段低い段丘面（だんきゅうめん）となりました。流域を拡大した木曽川はその後現在の流路に戻っていきましたが、後には湿地を残し、その結果、段丘面に湿地が入り組むという集落を形成するには大変適した地形になったと考えられます。

鵜沼古市場遺跡は、縄文時代から近世にかけての幅広い時代にまたがった複合遺跡（ふくごういせき）です。大河川である木曽川の沿岸に立地しているという条件は、当地に非常に貴重な価値を付随させていたと考えられます。古代、官道（かんどう）の一つである東山道（とうさんどう）が美濃国内を東西に横断していましたが、当鵜沼地区にはその通過点として、各務駅が設置されていた可能性があります。そして木曽川の渡河地点では人や物資の交流が盛んに行われ、やがて「宇留間市（うるまいち）」と呼ばれる市（いち）へと発展しました。現在の鵜沼地区一帯は、交通の要所として大いに賑わっていたことでしょう。中世においても、木曽川上流にある良質な木材を筏流（いかだなが）しによって下流に運ぶ際の、中継湊的役割を担う鵜沼湊（うぬまみなと）として、水上交通の要地となっていました。

当遺跡においては、平成6年にA地区、平成10年にはB地区の、民間開発に伴う緊急発掘調査を実施しています。

鵜沼古市場遺跡の位置

古墳時代の住居跡 ～鵜沼古市場遺跡B地区～

住居跡 全景(北より)

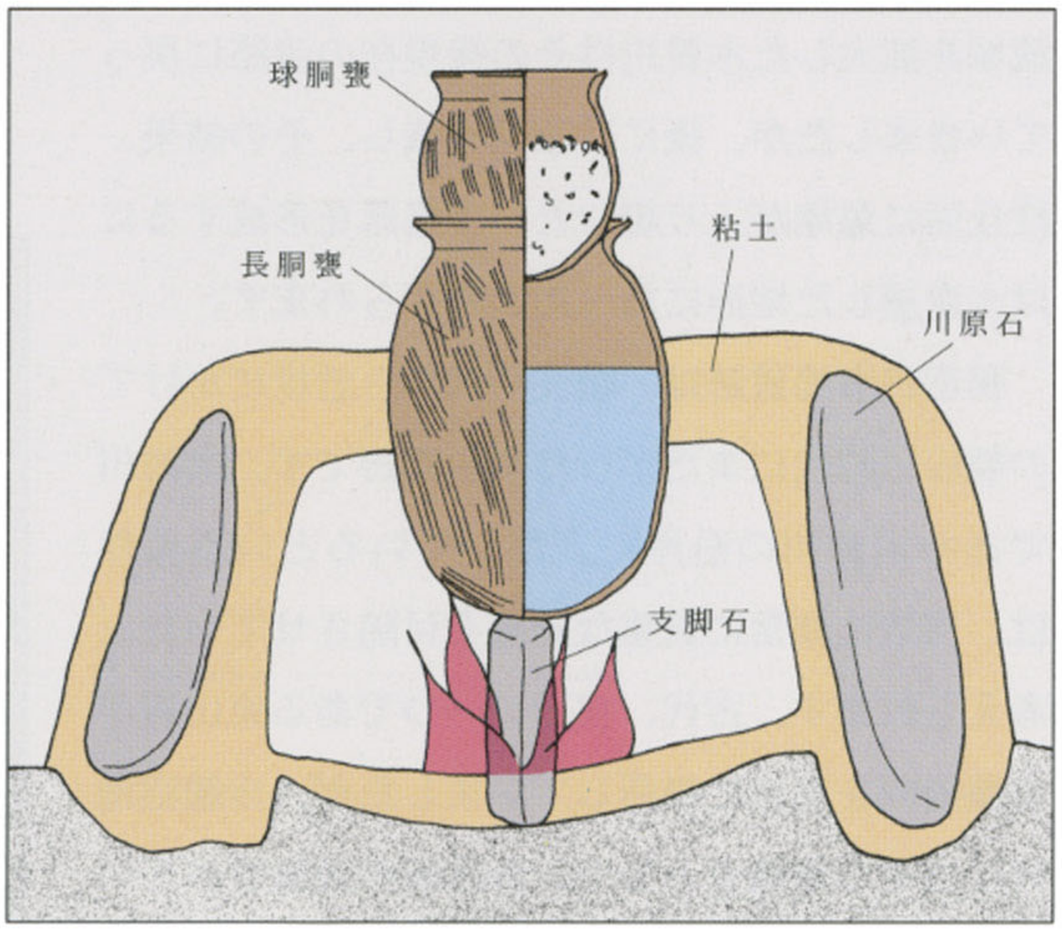
住居跡 貯蔵穴(南より)

鵜沼古市場遺跡B地区においては、古墳時代後期、6世紀後葉～7世紀初頭の竪穴(たてあな)住居跡が検出されました。さらに、遺構は確認されませんでしたが、出土した遺物から、その後も中世に至るまで断続的な土地利用が行われていたようです。

一辺5.5mを測り、四隅が丸みを帯びた方形の住居跡です。住居北側の壁に接してカマド、北東隅に貯蔵穴(ちょぞうけつ)、そして四隅には柱の穴が確認できました。貯蔵穴は、大きさ0.8m×0.6m、深さ0.6mの非常に大きくて深い楕円形の土坑(どこう)です。中からは完形の土師器(はじき)の球胴甕(きゅうどうがめ)（胴部が丸い）が一つ出土しました。

カマドは、住居の床を長楕円形に浅く掘りくぼめて、その両側に、扁平な川原石を2個ずつ縦方向に並べて据え置かれていました。カマド内からは割れた状態でしたが、少なくとも二つの土師器の長胴甕(ちょうどうがめ)（胴部が長い）が出土しています。両袖に川原石を芯材として据え置き、その周囲を粘土で覆っていた、壁に造り付けのカマドであったと考えられます。長胴甕には水を入れ、その上に甑(こしき)や球胴甕を置いて煮炊きしていたのでしょう。長胴甕の下には支脚石(しきゃくいし)と呼ばれる柱状の石をあてがうことによって、火の回りを良くしていたようです。当遺跡の南側には大河川である木曽川が流れており、この木曽川から豊富に得られる川原石を利用して、カマドを構築していたと思われます。

住居跡 カマドを構築していた川原石(南より)



カマド模式図

貯蔵穴やカマドから出土した土師器の甕（球胴甕・長胴甕）は、口縁部を上方に鋭く引き延ばした丸底の甕であり、その形状や使用している土などから、伊勢の方から持ち込まれた土器（伊勢型甕）と考えられます。この伊勢型甕は、美濃においては6世紀後半から7世紀代を通じて、揖斐川と長良川の全域、および各務原より西の木曽川流域において多く確認されています。各務原市内では当遺跡の他にも、山の前1号古墳（各務山の前町）、ふな塚古墳（鵜沼大伊木町）といった後期古墳からも副葬品として出土しています。遠く伊勢から美濃へと運ばれた土器、そこには、陸路だけではなく、水運を利用した運搬の可能性も考えられるでしょう。

住居跡 出土遺物（伊勢型甕）

中世の賑わい ～鵜沼古市場遺跡A地区～

SK-2 出土遺物（かわらけ、山茶碗）

SK-2 遺物出土状況（北より）

鵜沼古市場遺跡A地区においては、発掘調査の結果、縄文時代から近世にかけて断続的に生活が営まれていたことが分かりましたが、確認された遺構や遺物はその大半が中世に属しています。そしてこの中世の時代の遺構は、出土した遺物の形状等から、さらに大きく3つの時期に区分できました。12世紀末～13世紀初（第Ⅰ期）、13世紀後半～14世紀初頭（第Ⅱ期）、15世紀初頭～15世紀半ば（第Ⅲ期）の3時期で、第Ⅰ期・第Ⅱ期は鎌倉時代に、第Ⅲ期は室町時代に相当します。

SK-8は第Ⅰ期の遺構です。四隅が丸みを帯びた長方形状の土坑で、大きさ5m×2.6m、深さ0.6mを測りました。土坑の周囲には柱の穴の跡がいくつも確認され、そのうちの5つを結ぶと、やや不規則な形ではあるものの、ちょうど土坑の四隅を取り囲むような形になります。柱の穴の跡には、柱材を安定させるために使われたと思われる根石が残っているものもありました。この土坑は、周囲に柱を立てて屋根で覆われていたのかもしれません。出土遺物としては鎌状の鉄製品やフイゴの羽口が検出されており、鍛冶工房の跡であった可能性が考えられるでしょう。

第Ⅱ期の遺構であるSK-2は、丸みを帯びた土坑ですが、その大部分が調査区の外であるために全体の形状・規模は確認できませんでした。この土坑内からは、山茶碗（平安時代後期～鎌倉時代初頭頃までに発達した陶器）と共に、多量のかわらけが出土しています。‘かわらけ’は、平安時代以降に見られる素焼きの皿形の土器で、土師器の系統を引いています。食器や灯明皿として用いられていましたが、祭祀に伴う非日常的な土器としても使用されていたようです。破損していない完形のかわらけが多量に出土したSK-2は、祭祀に関連した遺構、もしくは祭祀儀礼に使用していた土器を一度にまとめて廃棄した土坑であるのかもしれません。

SK-8 発掘調査状況（南より）

第Ⅲ期の以降としては、SF-1のような石組遺構が確認されています。川原石の積み上げを三方向に行って方形「コ」状の壁を構築しており、大きさは3～3.2m×2.9m、深さは一番高い部分で0.7mを測ります。そして、囲まれた内部の床にも川原石が敷き詰められていました。非常に丁寧に構築されているため、一時的な利用に伴うものではなく、地下貯蔵庫や水溜めなど、経常的に利用されていたものであると考えられます。

SF-1 全景（西より）

まとめ

鵜沼古市場遺跡B地区では、市内でも調査事例のない古墳時代後期の住居跡が検出され、A地区では、中世における人々の生活の営みの跡が見つかりました。大河川の木曽川に臨む当鵜沼地域が、交通の要衝として時代を通じて大いに栄えていた様子がうかがえます。

室町時代には、美濃国を守護として治めていた土岐氏によって承国寺がこの地に創建されました。承国寺は、高い位を持つ官寺で広大な寺域を誇り、宗教的機能だけではなく、年貢の収納など役所的機能も兼ね備えていたといわれています。A地区では、承国寺が存在していたと思われる時期の大規模な溝状遺構が確認されています。屋敷や寺院等の大きな建築物に伴う区画溝であったと考えられ、承国寺に直接関連するものであるかどうかは不明ですが、寺院に伴う建築物が付近にあった可能性が考えられます。平成8年には承国寺跡を一部調査しており、土塁や溝状遺構、数多くの陶器類が出土しました。

承国寺跡 発掘調査による出土遺物（陶器類）

今後の調査・研究の積み重ねによって、承国寺など、この鵜沼の、そして各務原市の歴史も明らかになっていくことでしょう。